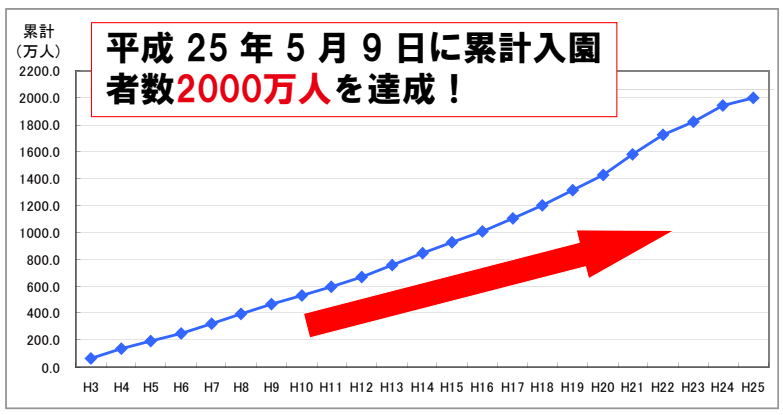
国営常陸海浜公園の概要

公園の位置

変遷と特徴

◆所在地：茨城県ひたちなか市
◆計画面積:約350haの国営公園
◆公園の歴史:S13日本軍の水戸東飛行場～S27米軍射爆撃場～S48の日本返還を経て、S54事業着手、S58国営常陸海浜公園基本計画、都市計画決定を受け、H3開園（70ha）、H24.1基本計画見直し、現在191.9haを開園
◆樹林地、砂丘、湧水地など多様な自然が存在
寒流と暖流がぶつかり、北方系・南方系の生物が混在



現状と課題

◆公園利用者の声（H22アンケート）
〇公園への要望：「自然（動植物）が楽しめる環境の整備」
◆公園の基本計画
〇「広大な自然環境の中に体験と活動の場を提供し、国民の資質の向上に資するものとするもの」
◆公園の基本計画の見直し（H24．1月）
〇「園内に残された広大な樹林地、沢田湧水地、砂丘・海浜環境を環境学習や体験の場として保全・利用」
◆自然環境に関する課題
〇樹林地：アカマツ林のマツ枯れ、希少植物の減少
〇沢田湧水地：湧水量の減少、地下水位の低下
〇砂丘・海浜部：砂の供給不足に伴う希少植物の減少

●平成25年3月に「国営常陸海浜公園・管理運営プログラム」を策定
→未開園の区域は環境保全エリアとして新たな施設整備は最小限とする方針
→下表に示す多様な主体が参画・連携し、公園の環境保全へ取り組む

里山パートナー	スクールパートナー	砂丘美化パートナー	野生植物パートナー
ハーブパートナー、記念の森パートナー、スイセンガイド、みはらしの里パートナー、フォトパートナー、パークアテンダント、BMXパートナー、常陸みんわの会、染と織パートナーの計13団体が活動中			

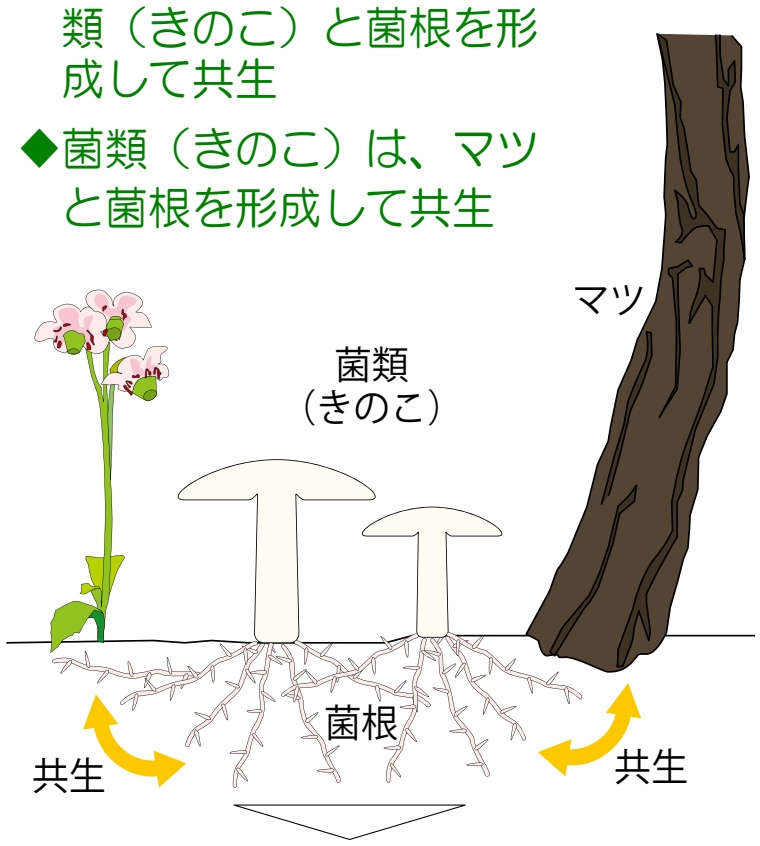
樹林エリア、沢田湧水地、砂丘・海浜エリアの保全と利用について、関係機関と連携し、各種調査や保全活動を実施中。その概要について報告する。

樹林エリア　－ オオウメガサソウの保全 －

オオウメガサソウの特徴

◆イチヤクソウ科の常緑低木
◆日当たりの良い、手入れのされたアカマツの林床で、砂質土壌に生育
◆高さは10cmほどで、6月が開花期
◆環境省：準絶滅危惧、茨城県：絶滅危惧IA類
◆本公園は世界の分布の南限地

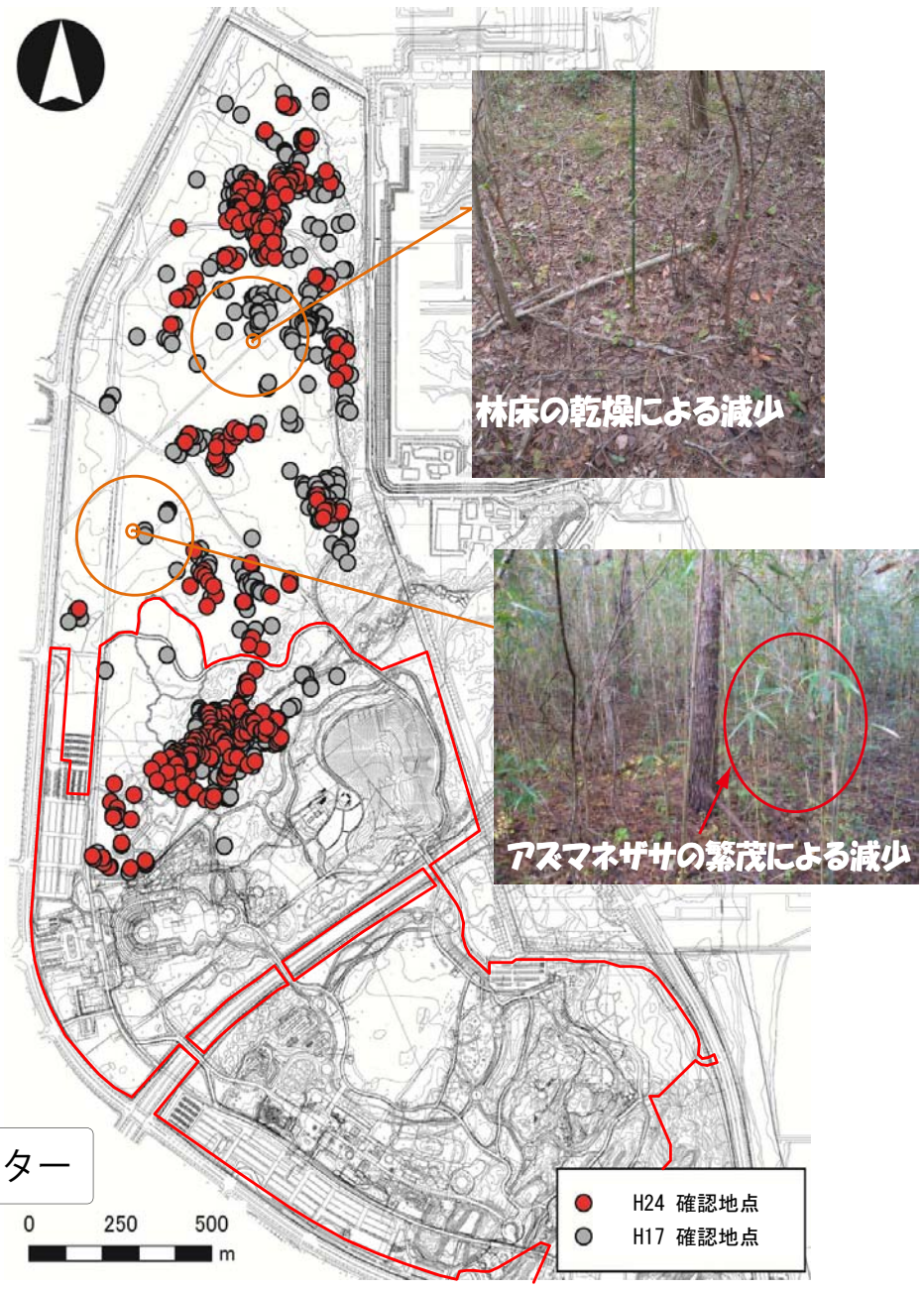
◆オオウメガサソウは、菌類（きのこ）と菌根を形成して共生
◆菌類（きのこ）は、マツと菌根を形成して共生



移植困難！アカマツ林の保全！

調査の結果

◆H17.3月の調査では538箇所、H24.12月の調査では404箇所で生育を確認群落
◆H24.12月の群落規模は2m×2m(10株程度)～10m×10m (1000株以上)まで様々
◆H17とH24の結果を比較すると、マツ枯れに伴う林床の乾燥、手入れ不足によるアズマネザサ等の下草の繁茂によって消失した箇所があり、生育数が減少



今後の対応策

◆3者の連携により、下草除去、間伐等のアカマツ林の手入れを継続
◆オオウメガサソウの群落規模に応じた管理方針（優先順位付け）を検討
◆薬剤注入によりマツ枯れを防除
◆H25の植生図作成調査時にマツ枯れ箇所を確認し、マツ枯れ箇所の早急な伐採、近隣行政と連携したマツ枯れ対策

国営常陸海浜公園事務所
管理方針の決定

ひたち公園管理センター

茨城生物の会
活動の指導

里山パートナー
(ボランティア)
保全活動の実施

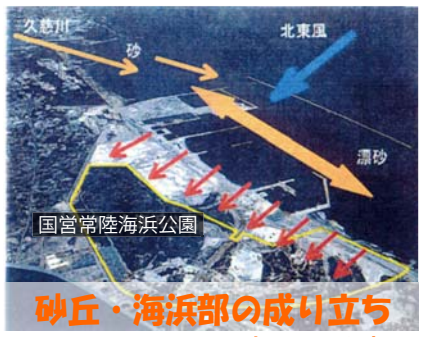
砂丘・海浜エリア ― 海浜植物の保全 ―

海浜植物の特徴

◆潮風、強風、高熱、砂の移動という砂丘の過酷な環境に生育

◆ハマヒルガオ、ハマエンドウ、スカシユリ等の多種多様な植物が生育

◆初夏には花々が美しい景観を形成



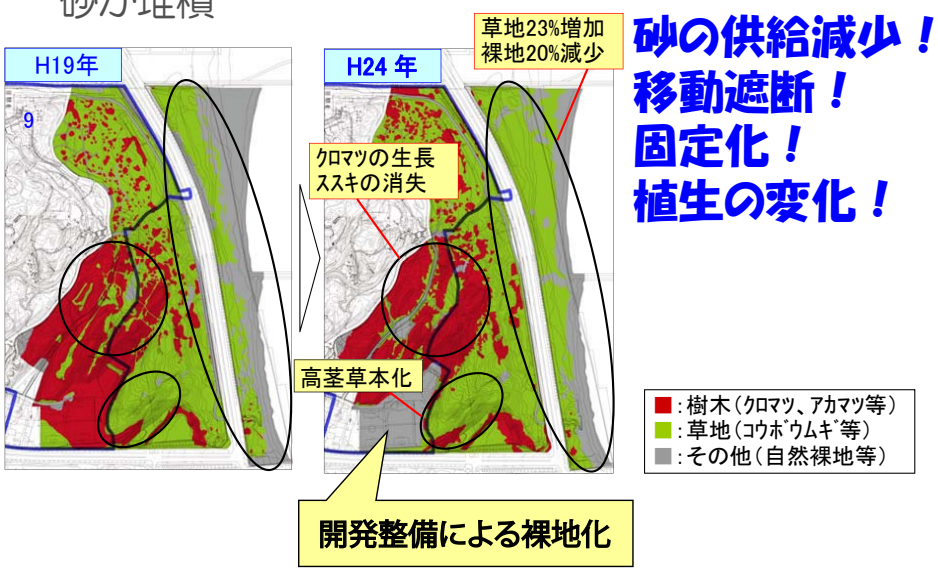
（イメージ）

砂丘・海浜部の成り立ち

1. 久慈川から運ばれた砂が漂砂となり、沿岸流や波によってって海岸に打ち上げられる
2. 北東風により乾いた砂が吹き飛ぶ（飛砂）
3. 防風林などによって遮られて砂が堆積

近年、海浜部と砂丘部の間の道路により砂の移動阻害が発生

砂の供給減少！
移動遮断！
固定化！
植生の変化！



調査の結果

◆H19調査では海浜性希少植物はハマグルマ等3種を確認したが、H24調査では10種の海浜性希少植物を広範囲にわたって確認

◆海浜部は、砂の供給が増加し、シロヨモギ、ハマグルマの生育株数が増加

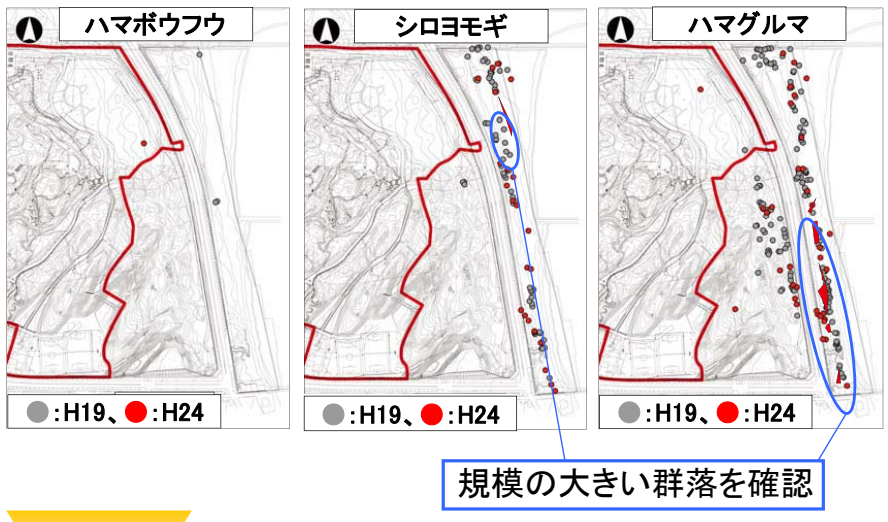
◆クロマツの生長、ススキの消失、高茎草本化、外来生物（コマツヨイグサ）の侵入など植生の変化も確認

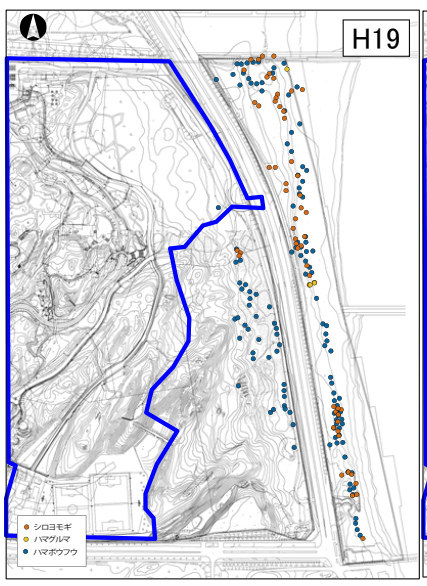
◆ハマボウフウは、H19は海浜部、H24は砂丘部で生育を確認（生育株数に変化なし）

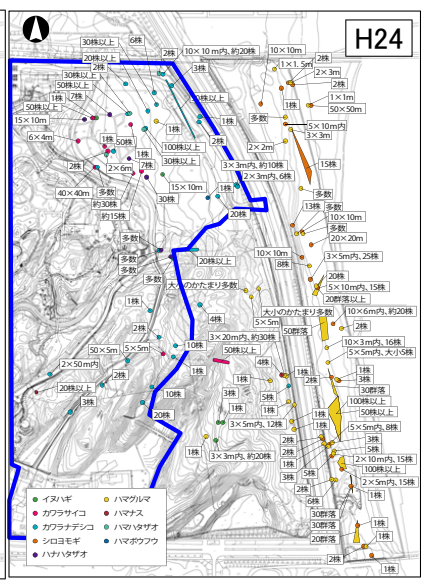
◆シロヨモギは、H19は砂丘部及び海浜部、H24は海浜部で生育を確認（生育株数が増加）

◆ハマグルマは、H19、H24ともに海浜部、砂丘部で生育を確認（生育株数が増加）

種名	貴重性		生育状況	
	環境省ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ	茨城県ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ	H19	H24
カワラナデシコ		準絶滅危惧		●
ハマハタザオ		絶滅危惧 II 類		●
ハナハタザオ	絶滅危惧 IA 類	絶滅危惧 IA 類		●
カワラサイコ		準絶滅危惧		●
ハマナス		絶滅危惧 II 類		●
イヌハギ	絶滅危惧 II 類	絶滅危惧 II 類		●
ハマボウフウ		準絶滅危惧	●	●
シロヨモギ		絶滅危惧 II 類	●	●
ハマグルマ		絶滅危惧 II 類	●	●
ビロードテンツキ		準絶滅危惧		●







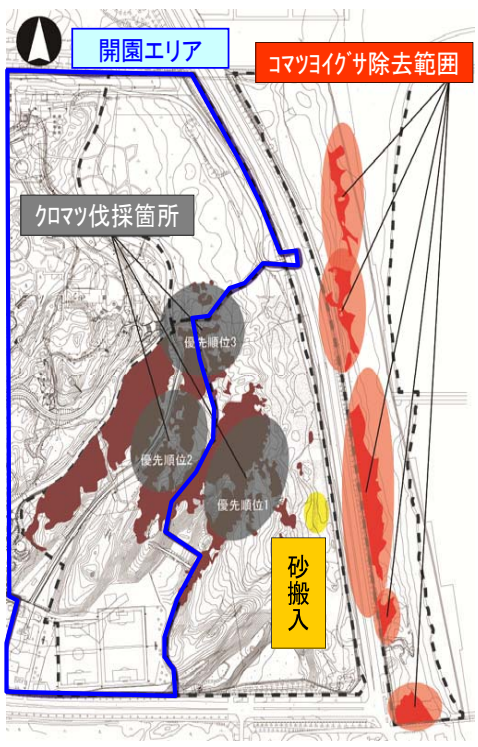
今後の対応策

◆草本植物の定着による海浜部の草地化抑制のため、コマツヨイグサ（要注意外来生物）を除去

◆砂の固定による砂丘の樹林化抑制のため、人為的に砂搬入を実施

◆クロマツの生長による砂丘部の海岸植生の減少抑制のため、クロマツ 幼木を除去

◆砂丘の復元のため、上記対策及びコドラート調査などをボランティアと協同して実施



沢田湧水地 ーオゼイトトンボの保全ー

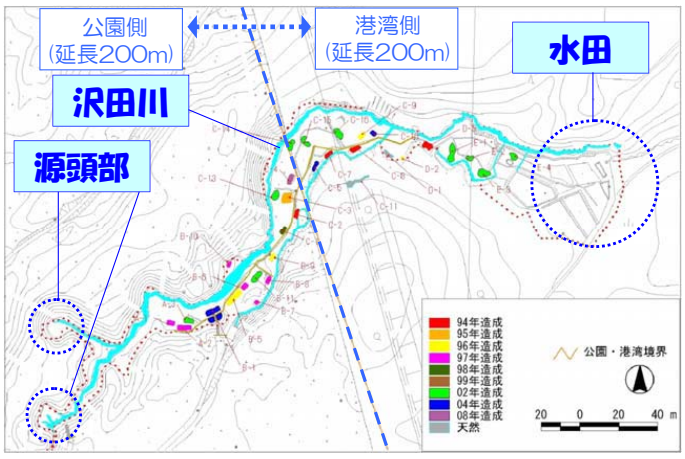
沢田湧水地の特徴

◆湿地が34箇所(ｵｾﾞｲﾄﾄﾝﾎﾞ繁殖用造成池31、天然池1、水生植物生育池2)

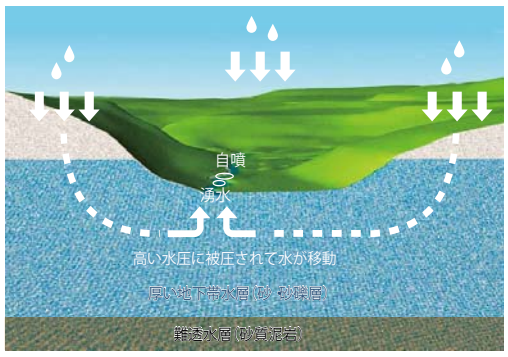
◆ﾎﾄｹﾄﾞｼﾞｮｳ(環境省:絶滅危惧IB類、茨城県:希少種)、ｵｾﾞｲﾄﾄﾝﾎﾞ(茨城県:希少種)など希少な種が生息

◆上流側は公園管理地で流域の環境調査を実施

◆下流側は茨城県の港湾管理地で流域の地下水調査を実施



沢田湧水地のしくみ

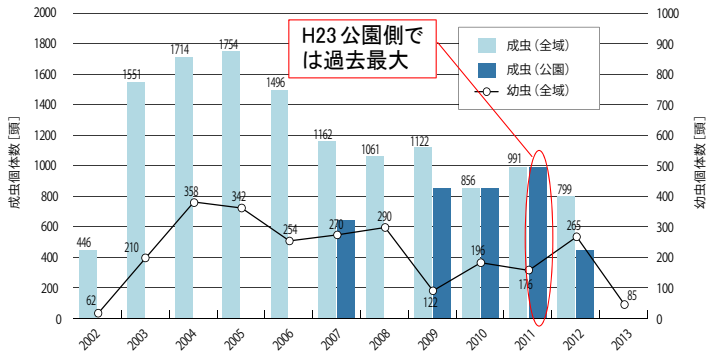


◆降雨が地下に浸透していく過程で、被圧された地下水が谷状の源頭部から自噴

◆1997年以降の湧水量は、1000㎥/日程度で安定(ﾋﾟｰｸ時の1/4程度)。源頭部0.3㎥/分、下流部1.05㎥/分

調査の結果

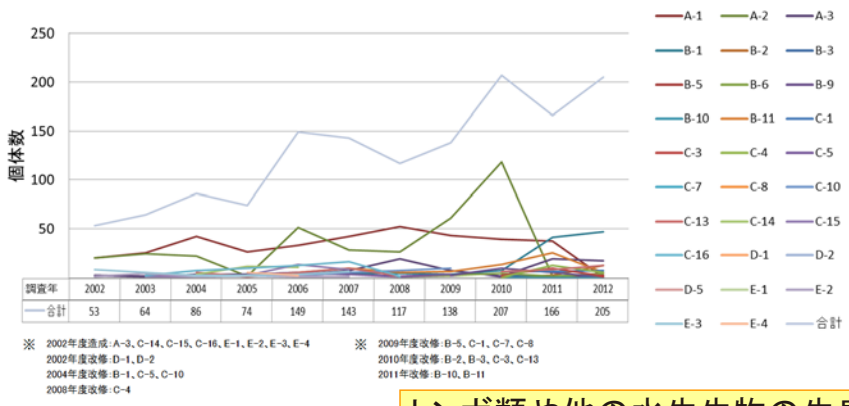
◆H24調査では、オゼイトトンボの成熟個体、幼虫ともにやや減少



※成虫の個体数は成熟個体の確認総個体数(水田湿地、その他エリア含む) ※幼虫は池0.5㎡当たりの個体数

※2010&201 1年の成虫は公園側のみの確認数 ※2011&201 2年の幼虫は公園側のみの確認数

◆H24調査では、ホトケドジョウの個体数は増加傾向



調査年	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
合計	53	64	86	74	149	143	117	138	207	166	205

※ 2002年度造成:A-3、C-14、C-15、C-16、E-1、E-2、E-3、E-4
2002年度改修:D-1、D-2
2004年度改修:B-1、C-5、C-10
2008年度改修:C-4

※ 2009年度改修:B-5、C-1、C-7、C-8
2010年度改修:B-2、B-3、C-3、C-13
2011年度改修:B-10、B-11

今後の対応策

◆効果の検証

H24年度は右図の対策を実施。湿地復元効果を検証するため継続的にｵｾﾞｲﾄﾄﾝﾎﾞ調査などを実施

◆管理の効率化

港湾側の池のかいほり、保全対象種の生息しない池を埋戻すなど管理を効率化

◆水収支の検証

源頭部の湧水量に対し、下流の定点流量は増加傾向。流域の水収支を調査

ま と め

◆現 状:本園は、特異な環境と希少な動植物が生存する価値の高い場所であるが、H18以降は特定種に絞った調査のみを実施

◆課 題:希少種の減少や絶滅が危惧

◆H25調査状況:園内全域の植生調査、砂丘復元のためのｺﾄﾞﾗｰﾄ調査、沢田湧水地での継続的なｵｾﾞｲﾄﾄﾝﾎﾞ、ﾎﾄｹﾄﾞｼﾞｮｳ調査などを実施

◆今後の対応:約5ヶ年を目処に順次相調査を行い動植物相の変遷を把握、ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ改訂へ対応、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ等とも連携したきめ細かいﾁｪｯｸ&継続的なﾒﾝﾃﾅﾝｽを実施